医薬品適正使用を推進する薬剤師の活動

座長
日本薬剤師会理事
井深宏和
埼玉県薬剤師会副会長
齊田征弘

本分科会では、医薬品適正使用の推進の中で今回はポリファーマシー解消について実際に取り組んでいる事例から考え方、手法を学び理解を深めていくことに焦点を当てる。

基調講演として厚生労働省医薬安全対策課の野村由美子氏から、厚労省では高齢者医薬品適正使用検討会を設置し、高齢者の医薬品適正仕使用の指針総集編および各論編を策定等、手順書運用や指針の有効性の検証や課題を踏まえた指針の見直し等を行っており、その紹介と医薬品の適正使用の主軸を担う薬剤師への期待について講演いただく。

次いで国立長寿医療研究センター薬剤部の溝神文博氏から、高齢者の医薬品適正使用に関連するガイドラインが公表される中で、医薬品の評価としての「日本版抗コリン薬リスクスケール」や包括的な視点の大切さから「高齢者総合機能評価（ＣＧＡ）に基づく診療・ケアガイドライン2024」、高齢者の全体的な健康状態を評価するために、多職種での視点・連携が重要であり「多職種連携を推進するための在宅患者訪問薬剤管理指導ガイド」が作成されたが、これらの最新の知見とガイドラインに基づく具体的な対策を紹介いただく。

続いて国立病院機構栃木医療センターの矢吹拓氏から、医師の視点で薬剤師に期待しているポリファーマシー対策として、薬剤師の専門性を生かして有害事象の早期発見や潜在的不適切処方へのアプローチがあり、医師や他職種との連携の中で、患者自身が自らの薬物療法を含めた医療や健康に興味や関心を持てるよう，ヘルスリテラシーに関わること等について講演いただく。

最後に、埼玉県保健医療部薬務課の中山悠子氏から埼玉県薬剤師会への委託事業として、薬局薬剤師と多職種との連携によるポリファーマシー対策推進事業において薬務課が深く関わったことで、市町村が行う保険者努力支援制度の重複投与者・多剤投与者に対する取組と連携して全県展開でき、県薬剤師会、県医師会、大学、保険者など関係者と協議しながらポリファーマシーの解消に成果を挙げた概要について講演いただく。

これらを通して参加者の先生方と討論し、医師への処方提案、患者への適正な服薬指導につなげていただきたい。

（井深宏和）

女性の健康課題と薬剤師による支援

座長
日本薬剤師会理事
小林百代
埼玉県薬剤師会理事
関口直邦

「女性の健康週間」というのがあるのをご存じだろうか。厚生労働省では毎年３月１日から８日を女性の健康週間と定め、女性が生涯を通じて健康で明るく充実した日々を過ごすことを目的とした様々な取り組みが行われている。多くの自治体においても女性の健康増進のための取り組みがされている。

女性は女性ホルモンによって健康を左右され、そのホルモン動態が一生のうちに大きく変化することが身体面のみならず心理面にも影響することが知られている。妊娠・出産といった人生の大きなイベントも乗り越える。加えて女性の社会進出が進み、経済産業省は今年２月に女性特有の健康課題による社会全体の経済損失の試算結果について公表し、その額は年額で3.4兆円とされた。女性の健康課題に向き合い対策を講じることは、女性の健康寿命を延ばすことはもちろん、日本経済にも好影響を及ぼす可能性がある。

さて、この分科会では女性の健康課題について、ＨＰＶワクチンと緊急避妊薬にテーマを絞って学ぶが、ＨＰＶ感染症も妊娠もパートナーがあってのこと。これらを理解するための基礎となる性教育の必要性について、埼玉医科大学の髙橋幸子先生に基調講演をお願いした。

ＨＰＶワクチンは子宮頸癌を始めとするＨＰＶが原因で起こる疾患の予防に効果的である一方で、接種後の副反応の懸念から接種の積極的推奨が中断された経緯がある。その後の調査研究より再評価され、現在では接種勧奨が再開されている。

緊急避妊薬は現在日本においては処方箋医薬品となっており、医療機関を受診することが必須である。しかしこの薬剤は、避妊せずあるいは避妊の手段が適切でなかった性交から72時間以内に服用する必要があり、その時間的制約の中アクセス向上等の観点からＯＴＣ化が望まれ、一部の薬局においてＯＴＣ化に向けた環境整備のためのモデル的調査が今まさに行われている。

ＨＰＶワクチンはＨＰＶウイルスが引き起こす種々の疾患から、緊急避妊薬は意図しない妊娠から、女性が自身を守るために活用されるものである。われわれ薬剤師には、対象者の不安に耳を傾け、対象者が自分の意志で選択できるよう情報提供することが求められると考える。そのためには薬剤情報に限らず性感染症対策や避妊についても知識を持つ必要があり、本分科会をその一助としていただきたい。

（小林百代）

彩（いろどり）ある未来、地域、社会で活躍する医療人の育成

座長
日本薬剤師会理事
山浦克典
埼玉県薬剤師会薬学生実務実習部会
中島孝則

2022年薬学教育モデル・コア・カリキュラムが改訂され、今年４月に入学した６年制課程の学生から適用となった。今回のモデル・コア・カリキュラムは、医学・歯学・薬学教育で同時に改訂されることとなり、「未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成」が共通のキャッチフレーズとして掲げられた。

慶應義塾大学春田淳志教授に、医学教育の立場から「将来の社会を見据えた医療者の育成について」と題した基調講演をお願いした。春田先生は、多職種連携コンピテンシーの研究もされていた医師であり、医療の構造的課題を提示しながら、高齢化社会の中で必要となる多職種に求められる共通の理念と医療人教育について解説していただく。

ベストセラーとなった「先生、どうか皆の前でほめないでください」著者の金間大介金沢大学教授から、「『素直でまじめでいい子』でも『失敗することが怖い』：いい子症候群の若者たちと共に前へ進むために」と題し、学習者である若者の置かれた環境や思考特性などについての解説を中心に、医療人教育の中でも活用できる育成法について講演いただく。学生教育のみならず、若手スタッフの育成にも参考になることは間違いない。

小佐野博史帝京大学薬学部名誉教授には、カリキュラムの改訂に関わった立場から、なぜ薬学部のカリキュラムに学修成果基盤型教育（ＯＢＥ）が導入されたのか、なぜＳＢＯｓ（行動目標）／ＧＩＯ（一般目標）がＲ４モデコアでなくなったかという背景を基に、カリキュラムと薬学実務実習ガイドラインのつながり、改訂薬学教育モデル・コア・カリキュラムの目指すことと臨床教育への有効な活用についてお話しいただく。

田島（埼玉県薬剤師会薬学生実務実習部会）からは、実際の実務実習での経験をもとに、薬局という学習環境の特性を示し、改めてガイドラインに示された患者から学ぶとはどのようなことかを一緒に考えたい。

薬学以外の多彩な演者の講演を聞きながら、これからますます多様性を増す社会に対し、薬剤師は何を提供できるのか考えるきっかけにしていただければ幸いである。

（田島敬一）

当ファイルの著作権は㈱薬事日報社またはコンテンツ提供者に帰属します。当ファイル（印刷物含む）の利用は私的利用の範囲内に限られ、それ以外の無断複製・無断転載・無断引用はご遠慮ください。当ファイル（印刷物含む）を社内資料、営業資料などでご利用される場合はご相談ください。
株式会社薬事日報社　TEL:03-3862-2141　shinbun@yakuji.co.jp　http://www.yakuji.co.jp/